

《月々の手入れ》

【12月】【1月】【2月】

ばらは12月(1月、2月)が1年のスタート時期と言われているように、今月から1月の冬季の作業が来季のばらの出来を左右すると言っても過言ではない重要な、そして最も作業の多い月となります。北陸の冬の訪れは速く、気圧配置が冬型となる日が多く、毎日のように天気はしぐれ、外で作業できる日が限られてきます。年にもよりますが、特に11月下旬から12月は雨が多く、寒気の強い冬型ではアラレや、初雪、12月中旬以降には積雪も見られることもあります。本業の仕事で、休日が限定されている方は特に作業の優先度をつけて計画的に行わないと、遅れてしまいがちになります。冬に入るこの時期しかできない作業を優先的に行い、来春以降のばらに期待します。

冬場の重要な作業特集

1. 購入大苗(裸苗)の植え付け(地植え・鉢植え)
2. 植替え・株の移動(地植え・鉢植え)
3. 冬元肥の施肥(地植え・鉢植え)
4. 冬越しの仕方
5. 冬の消毒

なお、これらの作業は天候の具合を見てなるべく12月から2月までに終えることです。春花をあきらめるなら春の剪定前まで作業は可能です。鉢植えで特に春に活躍する品種(H T: ローゼークリスタル、熱情、F L、シュラブ全般、つるばら等)は早めに(11月下旬から12月上旬)植え替え作業を行うことが大切です。

また、これらの作業を計画的に実施するための肥料や堆肥、用土などの各種資材はホームセンターや通販等で準備しておきます。

新品種を導入しようとする場合、近くの園芸店で手に入らない場合はばら苗販売業者(ナーサリー)からカタログを取り寄せたり、今はほとんどの業者がインターネットで販売しているのでそれを利用します。

欲しい人気のあるばら苗を入手しようとする場合は、早めに夏の終わりから秋に注文しておかないと在庫切れとなりやすい。

1. 大苗の植えつけ

(大苗の入手)

新たにばらの品種を導入する場合は、夏ごろから予約注文したばら業者からインターネットや通信販売で裸苗を購入する方法が一番確実です。

〈ばら苗販売業者の形態〉

- ①業者自身が接木して大きく育てて販売
ばら専門業者で、自身の育種品種を含めて、種苗法との関係もありますが国内外の育種家やナーサリーと販売契約を結んで生産販売しています。国内の大きい実績のある販売業者が多く、毎年カタログを発行し通販やインターネットで注文できる。苗の在庫も比較的多く、価格も標準的で求めやすい。
- ②苗を仕入れて鉢植えにして販売する
国内外のナーサリーから裸苗を仕入れて鉢植えで販売する。インターネットの業者に多い。苗の在庫は少な目で人気種は前シーズンから注文しておかないと手に入りにくい。またポットに植えて販売するため価格は高めである。
- ③鉢植え状態の苗を仕入れて販売
国内の業者から鉢植えで仕入れて販売する。ホームセンターに多いが時に品質の悪い苗もある。現物を見て購入できる利点はある。

通信販売の予約注文裸苗(大苗)は早ければ10月下旬ごろから送付されてきます。植える準備ができていない場合はとりあえず、鉢に植えるか、庭の片隅に根の部分に土をかけて、仮植えしておきます。くれぐれも到着したまま何日も放置しないことです。また根を水につけて放置するにも限界があり、室内だと芽が動き出すことがあります。

(1)地植えの植え方

初めてばらを植える場所ではセオリー通り直径、深さとも40～50cmの穴をスコップで掘り上げます。

初めてばらを植えつける場所では、掘り上げた土に2、3割ぐらいの完熟の堆肥(馬糞、バーク堆肥類等)とくん炭を混ぜ、穴に戻し、根を広げしっかりと植穴を足で踏んで陥没しないように植えます。

植えつける深さは株元の接ぎ口付近を土の上に出す深さにします。

必ず支柱を立て、ビニタイ等で枝をしっかりと止めます。

植えた後、水遣りや雨等で次第に植穴が陥没しますが、同時に苗の陥没と強風等で株が揺れるのを防ぐためにも必要です。

当地での平野部の土質では、これで十分、立派なばらに育ちます。

なお、コンテスト派では牛糞堆肥等の生籾殻を使用した堆肥類は分解が悪く、いつまでも土中に不要な窒素分が残り、あまり使用しない。

また、腐葉土も癌腫菌を含んでいるリスクが高いので使用しない。その点、完熟馬糞堆肥は分解も早い。同時に海藻系の土壌改良剤(ボカシコンブ)を1割程度混ぜます。特に乳酸菌発酵のペレット状のものを使用すれば癌腫病の発生が抑えられるようです。堆肥類、例えば馬糞堆肥 NPK=0.70 : 0.36 : 0.44 肥料要素は微量ですが、含んでいることを知っておきます。

(2) 鉢植えの植え方

新しく、裸大苗を鉢に植える場合は、8号～10号鉢に通常の鉢植えの要領通り植えつけ、必ず支柱を立てて苗が風等で動かないようビニタイ等でしっかり止める。

鉢の用土は市販のばら専用土でも十分ですが、鉢植えの数が多くなり植替え等も考えると単用土を混合して自分なりの用土を作り上げた方が経済的です。

市販の汎用の園芸用土に堆肥や赤玉土を加えて使用してもよい。鉢数が多い場合スリット鉢が機能性も高く安価でお勧めです。

【自家製鉢用土の混合例】

別表参照

【癌腫について】

最近は大手ばら販売業者の大苗でも癌腫になる確率が高くなっています。大苗であろうとも最初1年ぐらいは鉢で育て、様子を見てから地植えにする方が安全です。

2. 植替え・株の移動

(1) 地植えばらの移動

これまで地植えされていたばらを何らかの理由からスコップで抜く場合、そのまま廃棄するなら別として、大株に育った樹を植替えることは、太い根を多く切ることになり、樹の樹勢を削ぐこととなるため、株は弱り、よほど樹勢の強いばら以外は行わない方が賢明です。根を切って他の新しい土の場所へ移動させても強健な品種を除き、ほとんどの株は成樹になるまで3年ぐらいかかります。

(2) 地植えばらの移動・再植

地植えのこれまで植えてあったばらを抜いて、違う品種のばらと同じ場所に植える場合は、植穴を掘り上げた土は、ばらの成長に必要な各種肥料要素が失われているので廃棄して新しい土と入れ替えるか、3分の1ぐらいを捨てて、残りの土を土壌改良する。

そのままの土に新たにばらを植えつけても、肥料吸収が悪く大きく育ちません。長年のうちに土壌が酸性化したり、肥料吸着能力が失われ土壌が塩基化しているからです。

野菜園芸のように石灰で中和する土壌改良だけでは改善されにくく、新しい土とすべて入れ替えしたほうが近道です。新たに赤玉土又は赤土等を入れ、同様に 2、3 割の完熟馬糞堆肥、バーク堆肥等を混ぜ込み植えつけます。

この時、隣に古い背の高い巨大なばらがある場合は、新品種がよほど強靱な品種でない限り、土中の根が負けてしまい、成長しないことが多々あります。そのような場合、60ℓ以上の果樹栽培用の大鉢(直径、深さ 60×45 cm位)をすっぽり土中に埋めて、新しい堆肥等混合用土を入れ、植えた方が結果はよい。

なお、ばらは弱酸性質(PH6.0~7.0)の土壌を好むため、野菜園芸のように植える前に土壌改良のための石灰はあまり使いませんが、酸性になり過ぎた場合や土壌殺菌のためにあえて使うこともあります。土壌のPHが高くなります。

(3) 塩基化した土(古土)の土壌改良の方法

塩基化した古い土壌を改良するためには、土壌のPH値を計測し、6.0以下の酸性や、7.5以上のアルカリ性に傾いている場合は石灰を使用して中和します。その後1週間ほどして土壌改良資材を使用します。効果的な資材として腐植土(バーク堆肥)、モンモリロナイト(珪酸塩白土)、バーミキュライトなどがあります。珪酸塩白土より効果は少ないがゼオライトが安価で入手しやすい。その他微量元素としてマグネシウム、ホウ素など含む資材を投入すると良い。

(2) 鉢ばらの植替え

① 毎年植替え

鉢で育てたばらは特に小型のばら以外は毎年植替えた方がよく咲きよく育ちます。通常のばらは8号鉢以上、10号鉢が適正ですが、普通に育てて1年で根は鉢内いっぱいになります。

植替えないと翌年からの花つきや成長が大きく落ちます。近年、根が鉢内で丸く回らないスリット鉢が有効ですがそれでも10号鉢が新苗でも1年で根は鉢いっぱいになります。

② 植え替えの実践

根が鉢いっぱいになって植替えを必要としているかは鉢底から白根がはみ出して伸びている状態です。鉢の植替えは冬季に水遣りを4、5日控え、鉢の周りを外から軽くたたき鉢の内側と土に隙間

を作り株の根元を持って引き抜くと、鉢の形のまま土と一緒に鉢土が固まった形で抜くことができます。

鉢底から白根が見えない場合は鉢の形のまま抜けないので植替えの必要がないでしょう。品種によって根張りが弱い品種もあるのでこのような品種は毎年植替えを必要としません。

③不良苗の見極め

1年が経過して根の張りが十分でない場合は癌腫でない限り成長異常を疑う必要があります。特に底性品種でない限り新苗の場合1年で大きく育たない場合は何年たっても大きく育ちません。普通の品種でまれに品種によって大きく育たない株に遭遇することがあります。白根が十分張らない品種もあり品種による個性と考えますが、そのほかに台木のノイバラの個性も大いにあります。こんな苗に当たってしまった場合はあきらめるしかありません。このような株に同じ肥料・消毒・労力をかけるだけ無駄ですから早く見極めることです。

④鉢増しと植替え

鉢土をそのまま全量つけてひと廻り大きい鉢に移し用土を足すことを鉢増しと言い、開花期以外、夏場でもいつでも可能です。

⑤鉢増しの失敗

根張りが不十分で、鉢土がばらけた状態で鉢から無理に抜いて植え替えを行うと、その後成長が悪く、最悪の場合、夏場に枯れてしまうことがあります。これは成長期の白根を無理に引っ張ることでほとんど切ってしまい、再生に時間がかかり、しかも過酷な夏場を迎えることで大きなダメージを受けるためです。

⑥輸入ポット苗の鉢増し失敗例

近年手軽に購入できる鉢植えの開花ばら苗がたくさん流通し比較的手に入りやすく、実物を見て購入できるので人気があります。ところが春先に購入してもその年で枯らしてしまう例が急増しています。輸入苗は日本のノイバラ(ムルチフローラ)とは違う種類の台木(オドラータ等)に接木したもので日本の気候では成長が遅く特に冬に輸入されてポットに植えられ春に蕾が付いた状態で売り出されます。よって根はまだ十分に張っていないからです。

⑦鉢植え植替え時の具体例

植替え時、鉢から抜いた根土(用土)は、冬季休眠期に入る前なので上部・側部は軽く古土を落とし、下部は詰まった根をほぐし、白根の無い黒ずんだ古根を切り落とす程度にして。植え替えます。

植替え時のダメージは冬でも土を多く落とし、根を多く切った方が大きいので、古土を落とす量や根を切る程度は根の張り具合や株の強弱で調整します。さらに根土を水で洗ってさらに切り詰めた場合、さらにダメージは高くなり、株はリセットされた状態になり翌年の春花は十分に咲かなくなります。

肥料は冬用のリン酸・カリ分の置き肥をする場合、根へのダメージを防ぐため植替えして即座に与えず時間をおいて少量与えます。くれぐれも多肥には注意してください。カリ分の化成系肥料や有機肥料でも多すぎると白根を傷めダメージを与えます。



8号スリット鉢からスッポリ抜けた鉢土。根がびっしり詰まって底のスリットから出ています。



根土を100%近く落とし、根を半分ぐらい切りつめたところ

3. 冬元肥の施肥

冬の元肥は、教科書にはかつて、株の周りを30cm～40cmぐらい掘り、堆肥等と肥料を十分混ぜて投入すると書いてありましたが、油粕や骨粉しかない時代は生の有機肥料を土の中で熟成させて肥料として効力が発揮されるまで、時間がかかりました。そのため冬の早い時期から取り掛からねばならず、少なくとも12月中に終え、しかもかなりの重労働が必要でした。

最近の冬の元肥はリン酸とカリ分を中心に有機分を微生物(バクテリア)で発酵し肥料分として比較的早く肥効があるボカシ肥料を使用するようになってきました。このため極端に言えば春剪定の2月下旬から3月上旬までに施肥しても十分肥効が得られます。これらはあまり土中深く埋める必要はなく、表面に撒いて土と共にスコップで軽く埋める程度

(中耕)でよいと考えています。この時馬糞堆肥等も同時に投入しても良い。

(1)微生物の違いによるボカシ肥料

①嫌気性バクテリアボカシ肥料

嫌気性バクテリアとは簡単に言えば空気中の酸素を必要としないで発酵する細菌である。この代表作はEM菌を使用したEMボカシ肥料である。

この肥料の特徴は仕込み時には比較的短時間で仕込むことができることで、1日で作成でき、その後密閉して3カ月ほど発酵させてできるボカシ肥料である。茨城県のばら会が作って話題になり効果を上げています。但し、リン酸分の含有が少ないので別に補う必要があります。また、米ぬかを主体として多く使用するので窒素分も適当に含むので、夏の元肥には良いが冬には春の花に窒素が残留する可能性があります。

各種有機単肥資材やEM菌、糖蜜など買い集め数人で1日かけて作業し作る楽しみはあります。労賃を除けば若干の割安感があります。市販品もあります。

②好気性バクテリアボカシ肥料

好気性バクテリアとは逆に酸素を必要とするバクテリアで発酵させた肥料である。米ぬかを麹菌で発酵させる段階から始まり、納豆菌→乳酸菌など各ステージでそれぞれ数回の攪拌が必要なのと初期の段階では70℃近い発酵熱と相当の悪臭が漂い、しかも完成までには数週間かかります。真冬の低温時に仕込むと成功しやすいと個人ではこれだけの作業をこなすのはかなりの重労働となります。一般に市販されている有機ボカシ肥料はほとんどがこの製品です。

(2)冬元肥はリン酸、カリ肥料を多めに

冬はばらの樹に窒素分は必要なく、リン酸分を多めに、また根は冬季でも発達しやすいように、カリ分は12月中には投入したい。何回も作業できないのでリン酸分も同時に年間施肥量の2/3ぐらいは投入します。

(3)肥料の年間施肥量

①成樹の標準施肥量

当地の年間施肥量はHT標準成樹(樹齢3年以上、樹高1.5m、株周り1.0m)で窒素(N):リン酸(P):カリ(K)は50g:150g:50g

とします。冬季はこれの 2/3 位を投入します。P = 100 g, K = 約 33 g 投入することになります。

具体的にはリン酸分にバッドグアノ、カリ分に有機発酵草木灰を使用するとしたらバッドグアノのリン酸含有分は約 25%、草木灰のカリ含有分は約 20%と表示されているので、バッドグアノ 750 g に草木灰約 170 g を投入します。この 2 種類の肥料をあらかじめこの割合でよく混ぜ合わせてから施肥してもよい。

②地植え CL・FL・SR ローズの場合

花つきの多いつるバラ(クライミング)やフロリバンダ、など樹の大ききさにもよりますが、多めに投入しています。シュラブローズなどイングリッシュローズ系など多肥料を嫌う品種は加減する。

③PK 専用有機肥料

この他に近年、有機ボカシ肥料で N : P : K が 0 : 26 : 16 の肥料がありますが、石灰分が多いのと PH が 13.0 と強アルカリ性で、しかもカリ分がやや多すぎるので、特に植替え直後の鉢への多用には注意します。

④リン酸カリ肥料の効用

これらの冬元肥に窒素肥料を含んでいなくても春一番花の終わった後にはすぐに立派なシュートが出てきます。これは冬の間にかリ分により根が十分発達して働き、シュートを出すのに必要な窒素分を馬糞堆肥や土中から効率よく集めるのではないかと考えます。

4. 冬越しの仕方

(1) 仮剪定

当地では秋ばらが 11 月中旬以降になると、それ以上花は咲かず、枝の成長もわずかとなります。平均気温が 4℃ 以下となるとばらは成長を止め、休眠状態となります。つるばら以外のばらは伸び過ぎた枝を半分ぐらいに切りつめておきます。

(2) 積雪対策

当地でのばらの冬越しは秋のばらが終わった後、積雪前までには作業を行いたい。近年、平地での積雪は少なくなったとはいえ、最低限株を守ってあげます。厳寒時でもマイナス 6℃ 以下にはならないので株全体をわらコモのようなものですっぽり覆う必要はありません。



- ・積雪による枝折れを防ぐため支柱と荒縄を枝全体にひと巻きする。
- ・株の高さを半分ぐらいまで切り落として風雪害のダメージを受けにくくする。
- ・来春まで株の充実を図るため、残った葉はすべてかきとる。

(3) 下葉落とし

来季の枝を充実させるため冬季葉は不要なので予めむしり取っておきます。特に充実したシュート枝はいつまでも葉をつけているので葉はむしり取った方が賢明です。

5. 冬の消毒

かつて、ばら栽培本には冬季にはシーズンに出た黒星病やうどん粉病を撲滅させるため、冬季専用の消毒薬、「石灰硫黄合剤」「マシン油」などを適用希釈液で散布しましょう。と書いてあります。

しかし、冬季これらの消毒を行っても黒星病やうどん粉病は完全に消滅することはできず、シーズン中にはまた発生してしまいます。

「石灰硫黄合剤」は使用後よく洗浄しないと、噴霧器の金属部分を腐食させます。洗浄は食酢を100倍ぐらいに希釈して器具を稼働させ全体を洗浄し、その後水で稼働させよく洗浄することが必要です。

「石灰硫黄合剤」はその後大型容器を除いて手ごろな大きさの薬剤は販売しなくなり手に入らなくなりました。

(1) 冬消毒の不要

以上のように、冬の消毒は必ず必要とは言えません。黒星病やうどん粉病はシーズン中こまめに消毒すれば出さなくて済むし、どうしても自分の庭で1番に発生するばらは、無用の長物と思って早く諦め、退場してもらうのが近道です。その様なばらに同じ労力を費やし、その他の大事なばらに蔓延させては何の得にもなりません。

また、カイガラムシがつくので冬、マシン油で消毒すると効果的ですが、そもそもカイガラムシがばらの幹に発生するという事は、午前中の日差しが少なく、風通しの悪い場所に植えてある場合が多く、発生した枝は切除し更新する。また、シーズン中でも使用できるカイガラムシの薬剤に「アクテリック」があります。

鉢用土(ブレンド例)

資 材	容量 (ℓ)	%
赤土(赤玉小・中粒) *	50	44.6
鹿沼土中粒 *	10	8.9
馬糞堆肥 注 1	8	7.1
パーライト *	8	7.1
ココヤシチップ 注 2	8	7.1
籾殻くん炭 *	8	7.1
ゼオライト 注 3	4	3.6
ボカシコンブペレット 注 4	8	7.1
ピートモス 注 5	8	7.1
計	112	100.0

参考：鉢の容積

10号	8.40
9号	7.3
8号	5.1
7号	3.5
6号	2.2
5号	1.0
4号	0.6
3号	0.3

* 必須資材(この場合の混合歩合は 7:2:0.5:0.5 等任意)

注 1 堆肥は他にバーク・牛糞・腐葉土等何でもよいが完熟したものを使用する。

注 2 ココヤシチップは保水力と団粒化を高め用土を軽量化するためで特になくても良い。

注 3 ゼオライトは保水力を高め、特に古土の土壌改良に効果あり、無くても良い。

注 4 ボカシコンブペレットは微量要素を付加する資材、ペレットは乳酸菌発酵であり、痘痕癌腫に効果あり。特に無くても良い。

注 5 ピートモスは保水力・水はけ・土壌改良等効果が高い。鹿沼土とどちらか使用でもよい。併用の場合は酸性度に注意する。

酸度調整済みを使用しても良い。

最初の通水時、水に馴染みにくいので注意する。